

第213話 口誦文芸⑤ 「替女説地震身上」 その5 中山町 歴史散策

「替女説地震身上」には、文政11年11月2日朝五ツ時の越後大震災を語りながら、日頃人々が奢りにふけり、自らの職分を忘れて遊興三昧、みな奢侈に流れた報いとしてこのような大地震が起こったものだという、その世の中の乱れを微に入り細にわたって書き記しています。武士、商人、僧、神主、姑、嫁からあんま師に至るまで、手厳しい批判であり、医師の不勉強を責めています。下々の者は、口先上手や派手な衣服をまとう者に目も耳も惑わされてはいけないこと、身分の高いものは低いものに慈悲の心で接すること、つねに節儉に心掛けることを説くに至っては、その筆者は立派な社会改革派でした。

果たして、この台本に聴衆はどのように反応したのか、憶測の域を出ませんが、娯楽の乏しい幕末の弘化、嘉永時代はもとより、明治30年台、最上村の頃にも語られていたのでしょうか。

この中で興味を引くのは、新潟地震で地盤の「液状化現象」が起きた記述です。もともと新潟の海岸部の隆起と、信濃川、阿賀野川の洪水で砂泥が堆積したところで、既に150年も前に地震で地下から水や砂が吐き上げた現象を、多くの人々が見ていたということです。

この「替女説地震身上」のほか、秋葉弥右衛門家の「最上川稲船太平記」は、短編小説風の作品で幕末の「兵蔵一揆」を題材としたものです。庶民の側から一揆の姿に声援を送る場面も描かれ、文体もしっかりしています。おそらく、伊勢参詣の折、土産物として買い込んだ草紙を擬した文体が下敷きになっているのであろうと思われます。

また、「日記」の類にも「旅日記」「江戸駕籠訴日記」「農事日記」などがあり、文章文体に文芸作品に劣らぬものもあって、何れの機会に取りまとめめて、刊行する価値が残されていることを附記しておきます。

【語句の説明】

奢侈…度を過ぎてぜいたくなこと。身分不相応に金を費やすこと。

また、そのさま。

節儉…出費を控えるにして質素にすること。また、そのさま。節約。

駕籠訴…幕府の重職にある人や大名などの駕籠が通行するのを待ち受けて直訴すること。

※引用 中山町史 中巻 第10章第3節 文芸と美術工芸

私たち地域おこし協力隊です！ No.79

桜が咲き、陽気も良くなりました。新年度になり新しい生活になった方もいらっしゃると思いますが、皆様いかがお過ごしですか？

私は春になって心が軽くウキウキ気分、【のむおにぎり】試作品に向き合っております。このままハッスルしながら商品化に向け多くの壁を乗り越えたいと思います。

おかげさまで町民の皆様と交流することが多くなり、中山町川向金比羅樽流し保存会様とのご縁をいただき、中山町誕生70周年記念事業のひとつ『中山町川向金比羅樽流し』の紹介映像のナレーションを担当させていただきました。収録までにナレーションの原稿を良く読み込み、その歴史的背景を学ぶことで、より中山町を知ることができました。出来上がった映像を確認した時、この紹介映像をきっかけに中山町を知った方がたくさん訪れてくれることを想像して、勝手にワクワクしました。この習俗が大切に次世代に残されていくことを心から願います。



阿部美恵子

出身地：栃木県鹿沼市
趣味：高校野球観戦



のむおにぎり試作の様子

●協力隊への問い合わせ先● 阿部 ☎662-4271（総合政策課）